

FELLOWSHIP NEWS

フェローシップ・ニュース

アジア太平洋地域
アディクション研究所

FELLOWSHIP NEWS

2004年8月1日 発行
発行定日 毎月1回1日発行

アミティに行ってきました!!



アリゾナの施設 CIRCLE TREE RANCHのモニュメント。
「真実と優しさが友情を作りあげる」というアミティの哲学を円形のシンボルマークで表している。

今年二月、アメリカの犯罪者や依存症者のための更生・社会復帰支援施設「アミティ」に、三人のダルクのスタッフが研修に行ってきました。

アミティでは、刑務所の矯正処遇や薬物依存を経験した当事者たちが、12ステップを進化させた独特の回復プログラムを開発し、刑務所アウトリーチなどで目覚しい効果をあげています。

ジャーナリストの坂上香さんの紹介で「脱暴力のプログラム」として日本でも注目を浴びているアミティのプログラムを、実際に体験してきた3人の手記を一挙に紙上公開します。



目次：

アミティに行ってきました	1
アミティ (AMITY) とは?	2
ダルクスタッフたちの アミティ日記を一挙公開	4
不思議な力	11
薬物依存と家族 上岡 陽江	12
サルでもわかる アディクション講座	20
ラブ&マーシー 神無月才生	22
アパリ藤岡 アウェイキングハウス	24

APARIの フェローシップへ ようこそ!

APARIとはアジア太平洋地域アディクション研究所 (Asia-Pacific Addiction Research Institute) の略称です。

全国の依存症回復施設、教育・医療・司法関係者と連携しながら、依存症からの回復しようとする仲間たちの手助けをしているシンクタンクです。

アミティに行ってきました！

アミティ (AMITY) とは？

米国・アリゾナ州を拠点とする犯罪者やあらゆる依存症者のための社会復帰を支援する非営利団体（NPO法人）です。AMITYとはラテン語で友情・友愛を意味しています。世界的に有名な心理療法家アリス・ミラーの考え方に沿って、治療共同体（セラピューティック・コミュニティ）と呼ばれる心理療法的アプローチで20年以上にわたりワークショップを行ってきました。

その特徴は、プログラムへの参加者が今までの自分の生き方を見直し、新しい価値観を育み、そして新たな人生に向かい合うということにあります。心地よく安全なミーティング空間（サンクチュアリ）で、自らの感情を受け止め、他人の感情に共感する能力を高めていく（エモショナル・リテラシー）プログラムが暴力の被害と加害の連鎖を断ち切り、安定した平和な生活を築く力を与えてくれます。

カリフォルニア州ドノバン刑務所をはじめとする全米各地の刑務所では実際に、アミティのメンバーが薬物依存症者のための回復プログラムを実施しています。

アミティでは、アルコールおよび薬物乱用者から社会に適応できないあらゆる問題を抱える人々がケアを受けています。裁判所の判断によって、刑務所など矯正施設に拘束されるかわりに送られてくるケースや、友人や親族によって連れてこられるケースなどもあります。多くが子ども時代に何らかの虐待を受けており、その記憶を抑圧することによって他人への共感や反省が生まれにくい状況が作り出され、それによって犯罪や自傷行為に至るのだとアミティでは考えます。

アミティのプログラムは、心理療法の水準が世界最高レベルである全米で現在、最も効果のあるプログラムとして注目されています。100人ほどが一定期間生活を共にする共同生活プログラム、刑務所内で受刑者が中心となって行う刑務所内プログラム、依存症のシングル・マザーのための母子通所プログラム、社会復帰後のフォローアップ・ケアや訪問サービスなど、広範囲にわたる支援を行います。ファミリー・セラピーや子どもへのプレイ・セラピーなど問題を抱える本人だけではなく、家族へのケアも充実しています。

とりわけアミティ・プログラムは、再犯率の低さに定評があります。刑務所内の受刑者の平均再犯率は、アミティ・プログラム受講者の3倍近いという数字が報告されています。アミティのコーディネーターやスタッフたちが、社会復帰後も麻薬に手を出したり、問題行動に走ったりしないように継続的なサポートを行っているからです。



アミティ創設ディレクターのベティとシャナ、今回の研修に参加したメンバー、コウジ、ピー子、通訳の鈴木さん、セラピストの安高さん。（ニューメキシコの施設にて。）

アミティのスタッフのほとんどは以前、受刑者だった体験を持つ人たちです。アミティのプログラムを受けた後、専門的なトレーニングを受け、カウンセラーの資格を取り、インターンを務めた後、ようやくスタッフとして認められます。彼らもまた、子ども時代に深刻な虐待を受けた被害者です。

LAのアミティとは

Amistad de Los Angeles (men)

Location: 3745 S. Grand Ave., Los Angeles, CA 90007

Mailing address:

3717 S. La Brea #631, Los Angeles, CA 90016

Tel: (213) 743-9075

Fax: (213) 743-9079



屋外でのミーティング後、仲間が歌う歌をみなで聴いている。（アリゾナの施設にて）

カルフォルニア州の認可を受けている治療共同体。犯罪者やあらゆる依存症者の社会復帰を支援している。アミティ自体は1969年に始まったが、LAの施設は2001年に創設された。140人受け入れ可能で、現在78人の生徒がいる。5つのプロジェクトと2つのレジデンシャル(入寮施設)がある。職業訓練、親業(ペアレンティング)、アディクションや犯罪の再発防止、人間関係のワーク(異性関係、感情作業)、教育セミナー、コミュニティーサービス、お金の管理などのワークショップを行っている。1998年のドノバン刑務所の調べによると、アミティのプログラムを受けなかったグループは75.1%が刑務所に戻っているのに対し、プログラムを受けたグループは27.4%しか刑務所に戻っていない。こういった実績により、米国司法筋は現在、全米の全ての受刑者にアミティのプログラムを受けるチャンスを作っている。

トゥーソンのアミティとは

Circle Tree Ranch

Location: 10500 E. Tanque Verde Road, Tucson, AZ 85749

Mailing address: P.O. Box 32200, Tucson, AZ 85751

Tel:(520) 749-5980

Fax: (520) 749-5569

Enrollment Office: (520) 749-5360

Enrollment Fax: (520) 749-5379

依存症者である母親とその子供達、ホームレス、暴力の被害者、依存症者になるリスクの高い子供達、ギャングメンバー、受刑者の人生に対しての個々の人間としての尊厳を回復する場である。(ホームページから抜粋

<http://www.amityfoundation.com/default.htm>)

母子や家族グループの回復プログラムに深くターゲットを当てている点が特徴といえます。アルコール・薬物依存症のシングル・マザーへの子供連れの通所サービスなども行っています。女性の回復プログラムでは最高峰のレベルを備えた施設です。

ニューメキシコのアミティとは

Amistad de Nuevo Mexico

P.O. Box 2247, Española, NM 87532

Toll-free: 1-877-772-6489

Tel:(505) 753-0134

Fax: (505) 753-0144

アルコール、ヘロイン、その他の薬物によるニューメキシコ市の死亡率が国内平均に比べ15倍ということが

ら1999年12月に立ち上がった、女性専用のプログラムを行う施設。スペイン語対応。矯正施設、病院、学校などへのアウトリーチ、教育、予防、その他適切な治療施設への紹介、ファミリーサービス(家族関係調整など)、危機介入サービスなどを提供している。

アミティ研修日程表

ロサンゼルス(男性専用施設)

2004年2月5日~2月10日

(男性陣は2月17日まで残留の予定だったが、途中で予定変更)

ニューメキシコ(女性専用施設)

2月10日~2月17日

トゥーソン(アリゾナ)(男女混合施設)

2月17日~2月24日

研修メンバー

トオル(北海道ダルク施設長)

コウジ(同スタッフ)

ビー子(ダルク女性ハウス スタッフ)

安高真弓(ウイメンズオフィス・サーヴ代表)

鈴木美保子(通訳)

事務局

シゲヤ(アパリ スタッフ)

プーさん(同)

この研修ツアーは「平成15年度・三菱財団社会福祉事業ならびに研究助成」の助成金を頂いて実施されました。



ダルクスタッフ達の アミティ日記を一挙公開！！

2月5日 AMITY in Los Angels

ロサンゼルスのアミティに到着した。施設の内容の紹介を受けた。マーク(42)を始めとして5人のリカバリング・スタッフと分かち合った。

スタッフたちは、お互いに元気よく声を掛け合うことに気を付けていた。おちゃらけた感じではなく、みんな真剣だった。アミティでは、入寮者を「患者」とか「クライアント」とは呼ばず、「スチューデント」(学生)と呼ぶ。スタッフたちは、自分たちもスチューデントの一人であるということ強く意識している。セラピューティック・コミュニティー(TC 治療共同体)のスタンスを、決して上に立たずに「スチューデントと共に、スチューデントから教えてもらう」という受け止め方をしている。「ウェルカム！」という意識が強い。誰にでも絶え間なく声を掛け合っていた。

1日の生活を、朝から夜まできっちりと出来るようになるために、各スチューデントが皆、なんらかの役割を持っている。施設内にはとにかく掃除が行き届いている。

笑い声が多かった。言葉が分からなくて緊張し通しだった僕たちに、誰もが気さくに話し掛けてくれた。この雰囲気は、プログラムの効果なのか、文化的な背景の違いなのか分からなかった。

2月6日 AMITY in Los Angels

「ギャザリング」と「スタッフ養成講座」、「ハウスミーティング」を体験した。



LAアミティのディレクター、マーク・フォーセット氏と。

ギャザリングでは出席者がお互いを褒め合っていた。勇気、希望、人間性(責任)、能力。スタッフ養成講座では、TCの歴史や概念を、じっくりと時間を掛けて説明していた。言葉に丁寧だな、という印象を受けた。スタッフは「ファカルティ」入寮者は「スチューデント」ミーティングは「ギャザリング」という言葉を使っていた。ハウスミーティングでは「WANTS」(要求)と「NEEDS」(必要)の違いについて話し合っていた。

良いギャザリングには、プランニング(計画)が必要らしい。何を話し合うか、前もって計画していなければ、何も生まれない。ユーモア(ドラッグを使わずに楽しめる能力)、誉めあうこと、分かち合うこと、そういったエッセンスをどのように盛り込んでいくかをあらかじめ計画し、決めておく。それを、ギャザリング開始前にスチューデントが打ち合わせをしていた。

お互いを注意するのではなく、誉めあうことに、スタッフたちはとくに気を付けていた。朝のギャザリングは「ポジティブから始めよう」という意識が徹底していて、みんなでお互いの良いところを見つけて褒め合っていた。

スタッフ養成講座のとき、シュワルツネッカーがカリフォルニア州知事になって初めての囚人がアミティにやってきた。「刑罰よりリハビリを」という法律改正に基づく第1号ということだった。インテーク面接には、スタッフ3名とスチューデント3名が参加。ほかにも仲間がどんどん参加して「何を希望するか」「何をしたいか」を話し合っていた。相手を知ること。自分を知ってもらうことが重要と考えているようだ。1人か2人のスタッフがペーパーに書き込ませておしまい、というダルクのインテークとはずいぶん違った。

日本の施設はすごく閉鎖的だと思った。アミティはオープンだ。やっているプログラムはDARCの基本的な部分と変わらない。しかし、スタッフ一人一人の取り組む姿勢、優しさ、謙虚さが違う。自分のこれまでのやり方を反省させられた。

2月7日 AMITY in Los Angels

ハリウッドやチャイニーズ・シアターの観光に連れて行ってもらった。

コーディネーターのマークと、スタッフのダニー、スタッフ研修中のエリックと一緒に行動した。ダニーの家族の誕生日パーティーに連れて行ってもらった。ダニーの家族とのコミュニケーションの取り方は、とても暖かかった。アミティ



刑務所から来たばかりの仲間が体験談をしてくれた
(写真掲載は本人の許可を得ています。)

のスタッフとその家族が勢ぞろいしているパーティーだった。アディクトの回復は家族ぐるみなんだな、と思った。暖かい笑顔に包まれて、自分まで心が温まるのを感じた。



チャイニーズシアターにて

マークやダニーの話。刑務所ではアディクションは治らない。罪は償えても、アディクトはアディクトのまま、また社会に放り出される。セラピューティック・コミュニティーで働くスタッフの利益は何か？自分自身の回復、そして人が良くなることを助け、人間を広い視野で見ることを学ぶ。アミティがあるエリアは非常に治安の悪い地域だが、アミティはそこすらも変えていく力を持った。全米のほとんどの地域では前歴がある人には仕事がない。しかしカリフォルニアでは変わった。アミティの卒業生の多くが誇りを持って仕事に就いている。悪い行動を罰するか、教えるかの違いで人が変わり、社会が変わる。

今日、学んだ大切な言葉。

「他人の責任をとることは出来ない。でも、自分がまず責任を果たせば、他の人も責任を果たす」

「物事がうまくいっていないと感じるときだって、決してうまくいっていないわけじゃない」

「心を開いてお互いを知り合おう。偏見や差別は、お互いを知ろうとしないところから生まれる」

2月8日 AMITY in Los Angeles

トレランス（障害）博物館や、リトル東京などの観光に連れて行ってもらった。ディレクターのマークたちは施設のスタッフたちをこうした博物館によく連れてくるのだという。人権問題やホロコースト（ユダヤ人大量虐殺）などの社会問題を伝えるトレランス博物館になぜ、スタッフを連れて行くのか。その理由をマークに聞いて納得した。

「薬物依存だけの問題ならばミーティングに行けばいい。しかし、アミティではスタッフたちが抱えている問題の背景には薬物や暴力だけではなく、さまざまな社会問題があると考えている。だから、政治や文化、教育など、常にさまざまな角度からのアプローチで学べるようなプログラムを考えている」のだそうだ。

薬物依存に対するアプローチは、アミティとダルクでは大筋では変わらない。しかし、社会の仕組み、差別の問題、政治的暴力である戦争、社会問題の意味を教えることを優先的に考えているアミティはすごい！ダルクのスタッフも勉強しなくては！

LAのアミティでは、おおむね以下のようなグループ・プログラムをやっているらしい。

ドリル&クエスチョン

全員参加のギャザリングでテーマ・ミーティング。リーダーが最初に自分の話をする。
フォーラム形式のレクチャー・グループ
スモール・サークルズ
小さなグループ
コモナリティ・サークルズ
人種、抱えている問題など、共通点のあるグループ
アフタメーション・サークルズ
メンバーの良いところを見つけて誉めあう

2月9日 AMITY in Los Angeles

アミティのスタッフやスチューデントの体験談を聞いた。スピーカーたちの話すときの態度、またその後に質問するスタッフたちの態度は堂々としていて、尊敬を感じた。

アメリカ西海岸という治安の悪い社会を背景としているためか、体験談はかなりヘビーだった。レイプ事件の発生率が非常に高いと聞いてはいたが、女性スチューデントの体験談でそのことを聞いて、あまりの惨たらしさに怒りを感じた。

日本の治安は良いと言われている。しかし、施設の仲間たちの話を聞く限り、都市部の現実、とてもじゃないがそんなことは言っていない、という時代が来ている。近い将来、アメリカ並みの犯罪発生率に日本もなっていくと思う。そこでは常に弱い立場の女性が暴力の被害に遭っていくことを考えると、どうしようもない苛立ちを感じる。

スタッフ2名の体験談を聞いた。僕たちと同じリカバリング・スタッフだ。自分の苦しい過去をポジティブに捉え直し、目標を持って努力している姿に感動した。

施設にしがみついているのではなく、先の目標を持ち、叶えられたらまた次の目標を持つ。それがポジティブに生きるということだろう。ダルクでも、目標を持たない人は、ただ施設に「いるだけ」で、プログラムに集中しきれず、過去の自分や周囲の環境を責めたり恨んだり、次に進んでいけない人が多い。

自分のセルフケアに徹することはもちろんだ。しかし枠にとらわれず、自分が良いと思ったことをチャンスを見つけて



LAのスタッフ、ピートの体験談を聞く

まずやってみる、ということも必要だ。ポジティブに生きる、ということだってセルフケアの大きな要素のはずだ。

今日、教わった大切な言葉。

「考えないことは、人生に深刻な結果をもたらす。考えることが必要」

「明日が今日よりも良い日であるために、自分自身と向き合うこと。正気を失ってはいけない」

2月10日 AMITY in Los Angeles

通訳の鈴木美保子さんが今日から、ピー子たちと一緒にニューメキシコに移動してしまった。この研修プランを立ち上げたシゲヤからは「1週間、身振り手振りでコミュニケーションしてくれ」と言われていたのだが、む、む、無理だ！冗談じゃない！何にも分からない！スキンヘッドやムキムキマッチョ、タトゥーだらけの外人たちの中で、どうコミュニケーションを取ればいいんだ？

ギャザリングを経験した。アミティでは、10人以下の小さなグループを「サンクチュアリ・サークル」と名付け、入寮から退寮までのすべてのカリキュラムにおいて、サークルを単位として行動する。サークルを超えた施設全体の集まりのことは、ギャザリングと呼んでいる。

今日のギャザリングは、HIVとAIDSについての講演だった。こうした問題の知識を深めるために施設全体が集まるというのは本当に素晴らしいことだと思う。しかし、英語が分からないから、内容がまるで分からない。すごいストレスだ。

英語を聞くのがつらい！気持ちがどんどんネガティブになってくる。



LAのトレーニング・ジムとスタッフ。その体で無力とが言わないでね

ロスに来て1週間。時差ぼけが取れず、食事にも慣れない。朝6時から夜12時まで研修スケジュールはぎっしり詰まっており、体力的にも限界がきている。その上、通訳がないなんて！シゲヤめ、日本に帰ったら、覚えてるよ！なんて、恨み言を日記に書いていたら、今日マークから聞かされたこんな言葉を思い出した。

「人間として成長したければ、今までと違うことをしろ。それが冒険だ」

今日、教わった大切な言葉。

「自分の態度が変われば、自分の行動が変わる。行動動が変わると、結果が変わる」

「外の敵はあなたを傷つけるだけだ。でも、内側の敵は、あなたを破壊する」

2月12日 AMITY in Los Angeles

ぐずぐず不平ばかり言っても仕方がない。英語が分からなくても、少しでも何かを学びたいと思って観察する。

今日もギャザリングがあった。スタッフもスチューデントも、お互いをすごく大切に、まず誉めあうことから始めている。そうすることで、お互いの自尊心を高めあっている。サークルやサンクチュアリでは「安全で暖かい場所」ということをとことん意識している。「鳩が巣に入って休んでいるような感じ」ということらしい。親愛の気持ちを、からかいの言葉やイヤミに変えてしまう僕たちダルクのスタッフとは大違いだ。これはもしかしたら、人種や文化の違いなのだろうか？

チャイニーズ・シアターにマークが連れて行ってくれた。その帰りにタバコを買いに行ったのだが、タバコを吸わないマークはタバコ屋がどこにあるか分からず、イライラしてキレていた。探し回り、見つからず、「ファック」を連発していた。

施設に電話しても、分からない。運転中、前の車が少し遅れただけでも、クラクションを鳴らしまくった。それから少ししたら、マークはいきなり変なことを言い出した。

「HALTを知っているか？」(Hungry Angry Lonely Tired の略。空腹、怒り、孤独、疲れが、薬物の欲求が入る時の危険サインであるという戒め)

僕たちが「イエス」と答えると、

「僕はいまT(疲れ)の状態だけれど、H,A,Lは問題ない」とマークは言い、涼しそうな顔をしていた。

さっきまであんなに怒りまくっていたのに！変なヤツだ！噴き出しそうになった。なんだ、アミティのディレクターだなんていうからビビっていたけど、ダルクのスタッフと変わらないじゃないか！

そう考えてみると、施設の雰囲気も、アミティはダルクと



LAアミティには約1ヶ月間の研修の最初と最後に立ち寄った。「ここに何が出来るか楽しみにしていてくれ」とマーク氏に言われ、3週間後に見ると、遊歩道が出来上がっていた。アミティの設備はすべてスチューデントたちの手作りだ。

そっくりだ。

しかし、徹底的に違う点が一つある。施設に掛けられている金とマンパワーだ。スタッフ研修制度などのカリキュラムと、教育システムがしっかり整っている。施設内でのメンバーそれぞれの役割分担がはっきりしていて、入寮何ヶ月目かに研修に入ったスチューデントが、ほかのスチューデントたちの面倒を見ていく。施設内で一番きびきびと動いているのは、研修中のスチューデントたちだ。

2月13日

ロサンゼルスを脱出！ 通訳の美保子さん、ピー子たちのいるニューメキシコへ！ 冗談じゃないよ、シゲヤ！ 言葉の壁はやはり、どうにもならん！ ...メールで東京のシゲヤに連絡を取ったら「ストレスのない一番楽しい道を選んで下さい。つらい研修なんて、なんにも身に付かないでしょ？」だって。バカヤロー、最初からそう言ってくれー！

ニューメキシコまでの機上で、マークたちのことを考えた。

アメリカ社会には、「回復したアディクトは社会の財産だ」という考えが根付いている。薬物依存者は周囲の人間を巻き込んで、新たな依存者をどんどん作っていく。しかし、回復したアディクトは、まだ苦しんでいる沢山のアディクトの手助けをしていく。それをよく理解しているから、セラピューティック・コミュニティには、政府や州から金が出るし、リカバリング・スタッフたちのプライドも保たれる。

日本の現実には厳しいなあ！ ダルクのスタッフはみんな、生活保護を受けたりしながら手弁当で頑張っているのに、燃え尽きてリラプスしたりすると「ほれみる、ダルクは回復しない」とか言い出すバカがいるもんなあ。



イヴニング・ギャザリングの風景。

ではなく、ファシリテーター役のスチューデントが関わることで、テーマとなった当事者の感情爆発が抑えられているようだった。ファシリテーターの話がクッションのようになって、ある程度、逃げ込むべき感情の余裕があるように感じた。

ダルクのプログラムは12 STEPSの手法だけを取り入れているから、ミーティングはすべて「言いつばなし、聞きつばなし」だ。アミティでは、仲間が抱えている問題を引き出して、グループのメンバーの経験からアドバイスをしたり、誉めあったりする。反対に、きつく指摘しあうこともあった。しかし、トラブルは発生せず、仲間のアドバイスから自然な気づきを得ることのほうが、むしろ多いという様子だった。

アミティが、長い経験の中から練り上げてきたプログラムが、しっかりと確立しているからだろう。日本でダルクがこのミーティングをいきなりやったら、それまでに蓄積していた不満や怒りが爆発して、暴力に走ってしまうかも。ダルクでは、お互いを誉めあって信じあう関係よりも、本音と建前を使い分ける関係になってしまうことが多い。ダルクのスタッフと入寮者の信頼関係が、なかなか構築できない。「他人の問題には踏み込まない」という無言の鉄則があるからだ。

どうすればいいのかな？ 近藤さんやトムさんなどミーティング経験が長くて信頼されているメンバーがファシリテーターになってやればいいのか？ スタッフが第三者の仲裁役としてグループに入って、ファシリテーターをスチューデントに任せるのもいいのかもしれない。

1日が終わって、NAミーティングをした。(ピー子、トオル、コージの)3人いるから、NAミーティングができた。ストレスが相当にたまっていたらしく、すごくスッキリした。話をすることには、こんなにも効果がある。とても心地よいミーティングだった。

2月16日 AMITY in New Mexico

プレジデント・デーの今日は、本来は休日のはずなのだが、一昨日の問題でプログラムが変更になっていた。なにか



女性の施設の中は素敵なホテルのようだった

2月14日 AMITY in New Mexico

アルバカーキのアミティの通所施設はとてもきれいにアートされていた。

施設内では討論型のミーティングをやっていた。今日、発生したあるスチューデントの問題行動について、ファシリテーターが誘導する形で、ディスカッションしていた。酒を持ち込んで飲んだ二人が酔って喧嘩したらしい。本人たちもミーティングに参加していた。

グループのファシリテーターは、経験を積んだスチューデントが受け持っていた。ディレクターのシャナが立ち会った

問題が起きたら、ニューメキシコの施設では連帯責任、ということらしい。何も聞かされていなかった僕たちが9時半にランチに行ったら、全員で掃除していた。



ギャザリングには当事者たちは参加していなかった。「前向きになる(ポジティブ)とはどういうことか」という説明をスタッフがしていた。「みんな、こんな出来事があるんなら感情が出ていると思うけれど、こういうときこそ前向きにやっていかなければならない」「あなたはポジティブって、どういうことだと思う？」というように、質問を交えながら、レクチャーしていた。ポジティブという概念を説明するときに、必ずその対極にある「ネガティブ」という概念を説明していることが印象に残った。

ケーシーとボニータの体験談を聞いた。ケーシーはまだ施設に来たばかりで、体験談を話すのは二回目だという。サポーターを2人つけるように、シャナが配慮していた。

内容はすごくキツかった。勇気をもって話すケーシーの姿に感動するのだが、自分自身の過去に反響するような話もあって、聞いていて動揺した。話をすること、それを聞くことにパワーがある。それが分かっているのだが、キツくて耐えられないこともある。

今日はニューメキシコ研修の最終日。本当にみんな温かく、かつ厳しく接してくれた。

なんだか、僕自身の怒りの問題、否認の問題の、根本的な部分が見えてきた。みんなが共感してくれる、安心できる「サンクチュアリ」の中で、いままで僕が必死に封印してきた部分を解きほぐす糸口が見つかったような気がする。

この研修が今後、毎年続くのであれば、来年もまた来たい！来年に向けて、貯金しよう！そう思わせてくれた施設だった。

2月17日 AMITY New Mexico

Tucson

ニューメキシコの施設で、僕たちのお別れセレモニーを全員でやってくれた。

朝、アビーがハグをしに来てくれた。すごくシャイな人なのだが、日本から来た僕たちが今日帰ると知って、僕たちを受け入れるためにわざわざハグをしに来てくれたのだ。

アミティには「勇気の杖」というグッズがある。施設の中で役割を持たされたスチューデントが、勇気が無くて言うべきことをなかなか言い出せずにいるとき、この杖を渡される。サンドラという女の子が、その「勇気の杖」を僕にプレゼントしてくれた。

今朝、みんなでチューリップの球根を植えた。勇気を出して、彼女(サンドラ)の作業を手伝った。分かち合えることを信じて、萎縮せずにコミュニケーションをしたら、簡単に打ち解けることができた。今までの日本の生活での固定観念から、「自分はコミュニケーションを取るのが下手な人間

だ」という思い込みを、自分自身に植え付けてしまっていたように思う。「勇気の杖」がくれた勇気かもしれない。

お別れセレモニーのとき、日本の自助グループでのクリーン1年バースデーのとき以来の涙が出た。とても安心できた場所だった。皆の前で泣いても、恥ずかしさも何もなかった。ただ、ただ安心と気持ちよさが残った。自分自身と向き合える準備がようやく整ったのだと思う。

ニューメキシコの施設に、近い将来、また遊びに来たい！一生忘れられない思い出と体験をさせてくれたニューメキシコのアミティの仲間たちに心から感謝します。



お別れセレモニーの風景。一人一人に勇気の杖が渡された

2月18日 AMITY Tucson

ツーソンに移って第一日目。自己紹介と一緒に、自分の話(セルフ・ストーリー)をした。スタッフたちの笑顔がやはり印象的だ。新しく施設に来た人たちが「ここは問題行動を起こしてもよいところだ」と勘違いしないよう、今いる人たちに見本を見せるべく努力している姿が、スタッフたちに強く感じられた。

正直になることを第一にスタッフたちが心がけているのも、ダルクと同じだと思った。

スチューデントたちの問題行動についてディスカッションするとき、自分の体験を重ねて提案すると、そこに自分の問題も見えてくる。

2月19日 AMITY Tucson

朝のギャザリング、グループ・サークルでの分かち合い、散歩、夜のギャザリング、体験談などに参加した。

トゥーソンの施設は、ロスやニューメキシコと比べて、一

一つのプログラムに沢山のスタッフが関わっているように感じた。

グループ・サークルでミーティングを始める前に、ディレクターが、一つのグループを呼んでアドバイスをしていた。サークル内で話し合われたことについてはきっと、ファシリテーターが細かく報告しているのだろう。

サークル内では、メンバーたちがゲストの僕たちや、新しく来たばかりの人に参加してもらおうように心がけていた。

サークルではテキストに基づいて話し合われた。まず、子どもの頃の良かった思い出を参加者一人ひとりが話し、それから最悪だった思い出をみんなで分かち合った。

まずは良かった思い出で心を開放してから、嫌だった思い出へと話題を持って行った。アミティは、どんなプログラムでもそうなのだが、まずポジティブな話題から入り、深い部分へと降りていく。ギャザリングでも、朝は「ポジティブから始めよう」というのが合言葉のように、みんなでお互いを肯定的に誉め



「あなたのおかげで僕は助かった…」
ミーティング後のアフターセッションでお互いをほめ合う。

あっている。ミーティングの前後にも必ずアフターセッション（お互いを誉めあうこと）をするのだが、それが本当に「ここは自分が安全に話せる場所なんだ」という感じを与えてくれる。

夜のギャザリングでは、ヒーターの温度調整の話や、

「昨日の電話料金が12分で64ドル掛かっていました。誰が掛けたのか、いま言えなかったらあとで言いに来て下さい」などと話していた。施設のハウス・ミーティングと同じだった。まるで自分の施設にいるかのような感覚。ダルクと同じようなことにスタッフたちは頭を抱え、ダルクと同じようなことがここでも毎週、話し合われている。

サークルでは、自分の話をいっぱいしていた。ニューメキシコで心の扉が開いたお陰で、話をするのが楽になってきている。もっと自分の話をしたい、自分のことを知ってもらいたくて仕方がなくなっている。こんな自分に我ながら驚いている。自分のストーリーを話すことがこんなに気持ちのいいことだったなんて！

今日からは、自分に出来ることは悔いを残さないようにやっていきたいと思う。

2月21日 AMITY in Tucson

朝のギャザリング、スチューデントの体験談などに参加した。

回復の道のりは12 stepsのメンバーの話と同じだと思った。しかし、それぞれが自分の感情にはっきりと名前を付けて、感情のコントロールの方法を論理的に知っているのがすごいと思った。それが「エモーショナル・リテラシー」という

やつなのだろう。感情を言語化して対応する方法を、日本語バージョンで早急に知りたかった。それから、サンクチュアリ・サークルでのファシリテートの方法を知りたいと思った。

アミティのテキスト（スチューデント用、スタッフ用）の数はかなりあるようだが、手に入れて和訳してもらえないだろうか？（…現在、急いでやっていますよ！感情コントロールのワークシートもアパリで作成中です！…編集部シゲヤより）

「怒り」は、相手に対して自分のパワーを上げていること。「恨み」は、相手にコントロールされていることから生じる。そういう感情の問題を、明確に説明していた。

男性スチューデントたちが、女性の問題を、みな正直にシェアリングしていた。異性の病気が深いのは、世界のディクト共通らしい。問題を出しているスチューデントに、スタッフのボブが、自分の経験からシェアリングをしていた。男女の関係の境界線をはっきりと引くように提案していた。

アミティのミーティングでは、スチューデントに自分の問題を早い時期から意識させるようにしている。あえて問題を出させて、早い段階からシェアリングを繰り返し、意識化させているようだ。ダルクでは、そこに至るタイミングに時間を掛けすぎている。恐れが強いのかも知れない。サンクチュアリの中の「安心できる空間」ととことん大事にしているから、出来ることなのだろう。

サンクチュアリの中では、ビジターの僕たちであっても、とっても話しやすい。もっと自分の話をしたい、という気持ちになる。アミティのスタッフたちに、自分の問題を見透かされてしまっていた。「きみはインナー・ワークが足りないね。もっと自分の話をしなさい」と言われてしまった。

今まで出てこなかった自分の過去の記憶がどんどん出てきているのには、本当にびっくりだ。このプログラムを徹底的に受けてみたい。ああ、来年もまた来たい……！

食事のときに椅子を倒したら、ケーシーとジェシーがそれを見て、思っきり笑った。その後、バレーボールをしている二人を眺めていたら、一緒にやろうと誘ってくれた。言葉がわからずコミュニケーションが取れない僕でも、スポーツでは簡単に分かち合えた。すごく盛り上がり、笑いが絶えなかった。みんなで写真も撮った。楽しかった！



スタッフの体験談。施設長のシャナがずっと手を握っていた。

2月22日 AMITY in Tucson



トゥーソンの代表ディレクター、パメラの部屋。

メキシコに観光に行った。イブニング・ギャザリングや、さまざまなエクササイズに参加した。

12 Stepsが基本となってシナノンのプログラムが組みられ、それが発展してアミティのプログラムとなった。ディレクターたちは「アミティ・プログラムは12 Stepsが進化して出来た」と口を揃えている。

「言いつばなし、聞きつばなし」のミーティングに比べて、それではいったい、何が違うのだろう。ミーティング参加者たちの直感力を重視していること。初歩的な動機付けに重点をおいて、教育すること。ディスカッション方式で、自分の意識をとにかく前に出すこと。専門的な知識のない僕にはうまく言葉に出来ないが、なんとなく、肌で感じるものがある。これは、僕たちが必要としているプログラムだと思う。

日本の12 Stepsを進化させていくのは、12 Stepsを徹底的に取り入れているダルクの役割なのかもしれない。

アミティにダルクのスタッフをどんどん派遣して、その良いところをどんどん取り入れていけたらいいと思う。アミティの男性スタッフも呼んで、日本の仲間たちと分かち合いが出来たら、どんなに楽しいだろう！マークはすでに「俺が行く」と言っていた。日本でも近藤さんや、横浜のイサムさんたちが、刑務所でのプログラムを始めている。群馬のアパリにも前橋刑務所からコンタクトがあったらしい。

とにかく、まずは自分たちが薬物をやめるために必死だった。そんなダルクの活動の裾野がいま、ぐんぐん広がっている。アミティ研修はそんなダルクの活動にとってこの先、欠かせないものになるだろう。



ディスカッション形式のミーティングに参加。



トゥーソンの仲間たちの笑顔は最高にフレンドリーだった。



ま、そんなことより何よりも、自分自身の回復のために。神様、どうか来年も、この研修に来させて下さい！！

筆者：コージ・トオル・ピー子
構成：シゲヤ・ブーさん



ステンドグラスで作ったアミティのシンボルマークの前で。日の光が暖かい。

不思議な力

私は、計り知れない「不思議な力」を、お前の弱い力のない手に委ねる。
お前の仲間で、もっとも教養のある人達が、拒んだものが、今、お前に与えられた。

他の依存症者の回復を助ける不思議な力を、学者や政治家ではなく私はお前に与えた。
この力は利己的に用いるものではない。それには重大な責任が伴っているのだ。
問題は切迫している。どのケースも同情し過ぎる事はない。忍耐を持って行なえ。その力の運用をいかなる人種にも、教義にも、又、いかなる宗派にも限定しなかった。

これをするにあたって、お前は個人的に非難されるかもしれない。高く評価されないのが当たり前である。かえって冷笑されるだろう。

他の依存症者と一緒にする仕事は、いつも努力に見合った成果がないだろう。お前の動機は誤解され、反対される事も覚悟しなければならない。
人々の反対の叫びを、お前の自分の霊的な完全性に向かって上がる為の、梯子の棧だと思ふがよい。

この不思議な力を用いるにあたって、私はお前に対し、出来ない事を命じたりしないと記憶するがよい。
お前が選ばれたのは、お前に特別な才能が有るからではない。
そして努力が報われたら、自分の誇りとせず、私が与えた力によってだけ、それが出来たと思うように。
もしも私が、この使命を果たすのに教育のある人たちを望んだら、この力は医者や科学者に委ねられたであろう。もしも雄弁家を求めたとしたら候補者に事欠かなかったであろう。私が人類に贈った全ての才能の中で、もっとも利用しやすいのは、言葉だからである。
もし私が学者を望んだら世の中にはお前よりずっと優れた人々がいっぱいいる。
しかし私は是等の人々ではなくお前を選んだ。

お前が選ばれたのは、お前がこの世の中に見捨てられたものだったからである。
そこら中に依存症者の、孤独な心からくる悲痛な叫びが聞こえないか？
お前ならそれを聞き分けてくれると私は思ったのだ。
お前は依存症者としての長い経験によって、それだけ謙虚になったか、これから成る筈である。

お前がNAに入った時認めたことを、特別に無力であつたり、助かったのは、お前の命と意志を、私の保護に委ねた事に依ると言う事を、決して忘れない様にするがよい。



自助グループ NAに伝わる霊的な文献を転載しました。



薬物依存症と家族

上岡 陽江 (ダルク女性ハウス代表)

ダルク女性ハウスという施設を始めて、今年(平成15年)の12月で13年経ちました。私自身も、もちろん依存症の本人です。20年前にマックという施設でプログラムを受けて、薬物とアルコールを止めました。それから自助グループで回復してきたわけです。

今から20年前の依存症の世界はすごかったですよ。まず、女の人がない。アルコール依存の男の人たちがほとんどでした。いわゆる道に寝ている人たちが依存症。覚せい剤依存の人たちもいましたけれど、薬物というとヤクザのおじさんたちばかり。みんな背中に刺青が入っていて、トカゲの革みたいな靴はいて、すごいバックルして。背中あみあみの服を着て、刺青を見せて歩くようなおじさんたちばかりだった(笑)。みんな医療刑務所とか精神病院に入っていたような人たちで、身なりは怖いんだけど、口をぼかんと開いたまま歩いている。そういう人たちと一緒にミーティングに行っていたのが始まりでした。

その頃にはマックというアルコールの施設はありましたが、薬物の施設はありませんでした。「薬物依存症者はだらしがないし、良くはならない」と思われていたんですね。アルコールを治療する人たちはいるのに、薬物依存に関してはどこもお断り。特に覚せい剤依存だとしたら、病院はみんなお断りでしたよね。薬物依存者の入院はお断り。20年前だとね。止めた後のフラッシュバック症状の人は、たまに入っていることはあったけれど、病院のほとんどが「覚せい剤」と言っただけで断っていた。私の知り合いでも、トラブルに巻き込まれて頭を殴られて逃げてきた人でも、受け入れてもらえなかった。今でこそ公立病院に「依存症専門病棟」なんていうのがあったり、こんな風に「依存症者の家族教室」なんていうのが開かれますが、20年前と言うのは、そんな時代だったんですね。

それで近藤(ダルク創設者)が、薬物依存の自助グループの古い仲間たちと一緒に「どこかに皆がいられる場所を作ろう」と言い出したんですね。まずはとにかく「夜、みんなが泊まれるところを作りたい」という思いがあった。その頃、アルコール依存の施設はあったけど、薬物依存の施設はなかった。皆さんのお子様方もそうだけれど、やはり若い人たちが多かったんですね。若い人たちは、アルコール依存の人たちの中では上手くやれなかった。みんな、トラブルメーカーになっていた。だから、とりあえず昼間はアルコール依存の施設に行くにしても、夜はみんな泊まれるところをつくらうというのを、私とか近藤とか、古い自助グループのメンバーで始めてみたんです。鶯谷に一つ、古いお家を見つけたんですね。8人くらいで汚いところを掃除して、とりあえず夜、泊まれるところを作った。みんな、本当に行くところがなかったんですよ。アルコール依存の人たちと喧嘩しちゃうんですね。薬物のメンバーにしてみると、自分のお父さんがアルコール依存で家の中が大変だったのに、昼間通う施設でアルコール依存のお父さんたちの話をまた聞くなんで、嫌



上岡 陽江(かみおか・はるえ)さん。NPO法人ダルク女性ハウス代表。薬物・アルコール依存症からの回復者。仲間とともに女性のための薬物依存回復施設を運営して13年になる。子育てに悩む一児の母。

だって。両親と重なるから。そんな思いもあって、薬物依存の施設を作ろうということになった。そこで別に場所を探して、今の東京ダルクを作ったんです。

動機作りの場所

東京ダルクを作るために近藤が借りた場所は、倉庫だったんですね。「倉庫ですから人は絶対に住まないで下さい」「絶対に火は使わないで下さい」って厳重な約束があった。でも最初からガスはつけちゃう、人は住んじゃう。大家さんと約束したことは初めから破って、人は住むわ、火は使うわ。ただの事務所なのにヤク中はたむろするわ、でね(笑)。そこに皆で集まって掃除したり料理したり、お金を出し合ってダルクの電話を取り付けたり。近所にあった区立台東病院が閉鎖になるっていうんで、「好きなだけ持って行きな」と言われて、皆で机を運び込んだ。そういう風に始まったんですね。

周りの人たちは、「薬物依存者なんて回復しない」と言い切っていました。アルコール依存は自助グループが出来てきて、止める人たちはいるけれども、ヤク中はとことんだしらない連中だから、誰も止めやしないって。鼻つまみものだった。病院でも、お医者さんや他の患者さんを驚しちゃうたりするし、嫌がられている。

私の古い仲間が刑務所に何度も行って、刑務所を出てからもすぐに使って、妄想が出ちゃった。そうしたら、近藤がダルクを開いたばかりの頃、本所警察が、その私の知り合いをパトカーでダルクの前に捨てて行っちゃった(笑)。刑

務所から出てきたんだけど、すぐに使って妄想が出ちゃってね。どうにもならないの。警察も「邪魔くさいからそっちでやってくれ」って。近藤もびっくりしていました。「警察が人を捨てにきたぞ」って(笑)。「もういいから、捕まえるのも面倒くさいからお前、そこに行け」って言われて。そんな風に、初めからダルクにいた仲間たちって言うのは、刑務所も駄目、精神病院も駄目。精神病院も十何年いるとか、あげくには警察からも捨てられちゃったりとかね。本当に、何にも出来ない人たちだったんですよ。それで、皆でミーティングしたり、それから一緒に自助グループに行ったり一緒にご飯食べたり、それから仕事を少しずつ練習したりする仲間がいてね。それでも、止めない人は全然止めないですからね。もうね、笑っちゃうんだから(笑)。初めの頃のダルクなんてね、評判悪いなんてもんじゃないもん。だって、自助グループのミーティングやってる時に、ダルクの入寮者5人が全員出て行っちゃうんだもん。出て行って何をするかっていうと、ミーティング場の側に薬屋さんがある。買いに行くわけです(笑)。それとか、ミーティングの途中で誰かが電話しに行くと、途中で皆出てっちゃって、覚せい剤を使って帰ってくるわけね。近藤が夜、ナイトケアで待っていると、皆が帰ってくる。みんな覚せい剤を打っているものだから「泥棒が入る」とか騒いじゃって(笑)。覚せい剤を打つと脱いじゃうらしくて、全員パンツ一丁になって、大の大人が5人で皆で部屋の壁に張り付いてね。「近藤さん、今、泥棒が来ます、泥棒が来ます」って言ってね。近藤も入れて男6人だからね。「男6人そろって泥棒が来るなんて、何をびびってんだよ」って。「泥棒一人、なんだってんだよ」と近藤が言うのと全員で「近藤さん、駄目です、駄目です」なんて言っちゃって。そんなのがダルクだったんですよ。

だから、アルコールの施設の人たちしてみると、施設は止めるためにきてるところだから、飲酒を止める人たちがいる。でも、ダルクはちょっと違うんですよ。薬物依存の施設は若いメンバーが多いから、施設は、止めるための動機を心の中で作る場所でもある。アルコール依存の人たちは社会生活の色々な場面で行き詰まって、止めようと決意して、施設にやって来て入寮する。でも、薬物依存の人たちは施設につながってからの、動機作りの旅のスタートだったりするわけですよ。それから、みんな若いうちから使っていたり、使うと長い間引きこもっていたりして、社会性が無い人が多いんですね。だからダルクに来て、ダルクの中でクスリを止めている人たちを見たり、やっぱり使っちゃってっていうんで誰かをつるんで使ってみて、「やっぱり駄目だ!」とかね。そういう経験をしていく。そこで長く止め続けていくにはどうしたらいいかって言うと、長く止めている人について行ったらいいんですよ。ずっと安定して止めている人の側にいるということが大切なんですよ。始めはね。

つまんないからね、止めてる人なんて。使っている方が楽しいじゃないですか、事件は沢山あるしね。夜みんな楽しく女の子と一緒にどっか行こうとか。不安定な生活がしたいから。刺激的な生活がね。初めのうちは、つまんないですよ、止めている人と一緒にいるっていうのは。毎日会場に来て、ミーティングして、コーヒーの用意してって言うのは全然面白くない。そうすると悪魔のささやきのように「使わない?」とか、「手に入るよ」とかね。そういう声が聞こえてくる。若いメンバーたちだったら、「自分で何とかしなくちゃいけない」って言う気持ちにはなかなか、なれません。周りの人たちから見るとどうにもならない状態でも、本人からするとまだまだ遊べるし、使えると思っている。どうにもならない状態ではない。ダルクの昔の統計なんかを見ても、10年

位かかっちゃうんですよ。薬物に問題があるということが分かって、「自分は本当に駄目なんだ」って思うまでに、平均10年位かかっちゃうんですよ。いくら何でも10年というのは長すぎるので、もうちょっと狭めたいとは思ってるんだけども。

ある程度、色んなところをくぐっていかないと、身にならないんですね。薬物依存者は特にそうで、人から言われるのが大嫌いなわけですよ。さらに、クスリ止めたら、思春期ですから。ヤク中って、クスリ止めると思春期の子供になっちゃうんですよ。生意気でしょ?本当に生意気なんだよね(笑)。それで、止めた瞬間に、不愉快でしょ、不快でしょ。不愉快で不快で気分悪くてさ。借金なんかもいっぱいあったり。(お父さんお母さん、怒ってるだろうな)って申し訳ない気持ちもして、最悪な状態なんだね、止めたとき。けれども、みんなイエス・ノーがはっきり言えない人たちだから、みんなの手前、ニコニコしてたりするのね。ニコニコしてたりするような感じの時にはまだ止めないんだよね。自分で差し迫って、不機嫌な状態を周りに出せるようになってきたときに、ちょっと止めていけるかなって思いますよね。見栄を張らなくてもいいように、見栄を張る力もなくなってきたような時。

ただ、周りが耐えられないよね。うちの施設は女性だから、子どものいるメンバーがいる。あるメンバーの話だけど、ポロポロだったんだよね、3ヶ月前に会った時には。肋骨は折れているわ、足はくじいているわ、内臓の病気だわ。病院に行くのにも順番つけなきゃいけないような。今日はどこいく、明日はどこいく。すごいひどい状態だったのね。ポロポロで、口はきけない、歩くのにもまっすぐ歩けない。壁伝わなきゃ歩けないくらいだったんだけど、昨日も言っていたもん。「私は、まだどん底じゃない」って。「刑務所に行っていないから」って。

だって、そんなこと言ったって、周りは目を丸くしているわけです。私の内科の主治医が彼女も診てくれたんだけど、「やあ上岡さん、ああいう人は珍しいですよ」って。先生ですら、あまりにもポロポロだったんで、知的な障害があるかもしれないって勘違いしちゃった。「分かっているのかな?」なんて。知的障害はないんですよ、彼女は。でも外側から見たらそういう風に勘違いしちゃうくらいの感じだった。それくらい、依存症者の外側から見たイメージと、自分で持っている主観のイメージは、かけ離れているものなんです。「自分はそのままでポロポロだったのか」ということを、受け入れていくのがすごく大変なのね。格好悪いしね。周りから見たらポロポロで、やっていることは無茶苦茶で、嘘ばかりついていて、ひどい状態だけれど、なかなか本人は気づかない。

見守ることの難しさ

家族と本人の関係を考えると、そこのあたりで、家族が本人を支えてしまうようなことが時々ありますよね。時々っていうより、非常によくあることですけど(笑)。本人は何とも思っていないのに家族だけが「どうしましょう?」みたいな。

私にも小学校六年生の息子がいます。やっぱり、なんていうのかな。「手出しをせず何かを教える」って、すごく難しいですよ。ご飯を作るとか、洋服を買ってあげるとか、例えばゲーム買ってあげるとかかって、すごく簡単ですよ

ね。だけど、6年生になった彼には彼なりのいろんな問題があるんです。依存症の子だからね、やっぱりすごく問題がある。なんていうのかな。人間関係がやっぱり、難しいのよね。すごくのんびりした子だから...のんびりっていうか、ゆっくりなんです。全てが。いつもいつも、何をするのも最後にしたいのね(笑)。昨日も先生に個人面談で言われたんですよ。「一緒に列を作って歩いているのに、いつも最後になるのは、なぜなのでしょう?」って。「どちらかというとなりの場合、自覚的に最後になってるんですよ」って先生が。そんなこといったって、あの子、昔からそうなの。列を作っていると一番最後に必ずなりたがるんですよ。どうやっていっても「最後になる」って言うんですよ。「そう言われてもなあ...、先生、やっぱりうちの子、沖縄じゃないと暮らせないかしら?」とか(笑)。親が親なもんですからね。皆とテンポが合わなくて。でも、それは自分から入っていきこうとしていないって言うんですよ、先生が。「どう指導したら良いんでしょうかね」って。学習の時なんかはちゃんとグループでやっているし、集団が嫌いとか、できないとかっていう訳じゃないんだけど、いつもいつも後ろになりたがる。あれは何でかなあ、困るんだよなあ...と思って。オシメ取り替えるとかね、自転車の乗り方教えるとか、そこらへんまでは出来るけれど、他の友達とどう仲良くするかとか、そういうのは、ちょっと難しいじゃないですか。「あんたって、こういうの本当に下手なんだから」って言ったって彼だって困るだろうし。彼の個性なんだしって思うと、すごく困ってるんですよ、じつは今。

依存症者も同じなんです。トラブっているのが分かったって、止めないわけですよ。「止める」って言ったところで止めないし、「止める」とか言うともっと口答えするじゃないですか。家の子だって、「一緒に前に行け」とかってね、「先生に、こういう風に言われたんだ」とか言ったら、きっと怒っちゃって口も聞かないだろうし。学校で何かあったことも言わなくなっちゃうだろうし。そうすると...なんていうのかな。彼を尊重しながら、ハラハラしながら、見ていざるを得ないわけじゃないですか。

子どもと付き合うってというのは難しいですよ。

私の友達の子どもが今、大変なんです。その家のお父さんとお母さんが喧嘩していた時があって、お父さんが暴力を振るって、お母さんが逃げてくるとか、子どもがおびえてるっていうことがあった。私はとても心配していたんですよ。子どもの目の前で両親の暴力があると、子どもにとってはすごく負担になるんですね。お母さんが殴られたらお母さんのこと心配するし、殴られている人のこと心配するだけじゃなくて「自分が悪いんじゃないか」って思ってしまう。いつも何か悪いことが起きるんじゃないかってビクビクしていたりね。大体は、子どもって「自分が悪いんじゃないか」って思っちゃうの。暴力に出会った時ってね。その子が小学校3年くらいの小さい頃から私はそのお家を知っているんだけど、「この子は将来、大変だろうなあ」って心配していた。その子はいま中3になって、やはり問題になってきた。私の友達、つまりその子のお母さんが言っていた。不登校になったり、自分のガールフレンドに暴力を振るうようになってきた。暴力を見ちゃっているから、暴力で清算しちゃみたいなのところがある。私の友達はすごく悩んで、周りからは、家族の関係を変えなさいって言われる。ところが上手くはいかないわけですよ。夫との関係が簡単に変わるわけでもないし、彼女自身が持っている問題もあるし。彼女のお父さんがアルコール依存なんです。お父さんがアルコール依存で、小さい時にやっぱり大変な思いしてきているわけですよ。だから、とても不安が強い人なんです。



カット：きどりえこ

それで、彼女の息子さんを彼女が、すごくコントロールしていた。それを見ていて「危ないなあ」って思っていた。でもそれって、言ってもわからないんですよ。私からみて「コントロールしすぎだよ」って言っても、ピンとこないわけですよ。

きっと、自分の子どもとの関係を私が言われても、急に私と夫との関係が180°変わるわけでもないでしょう?うちの夫は、うちの子に対して無茶苦茶甘いんですよ。おもちゃを買ってあげることもしか考えてないみたいな。教育的な親じゃないんですよ、全然。「俺は絶対、あいつのことだけは怒らないからな」とか言っちゃって。「怒れない!」とかキッパリ宣言しちゃって、もう。「それじゃ困るんだよ、お父さん!」って感じなんだけど(笑)。そうすると子どもの問題が出てきたら、私と夫が話し合いをして、子どもに対応して行くことになるじゃないですか。そこでコミュニケーションが取れなかったら大変なわけですよ。

私の友達のところはコミュニケーションが本当に難しい。で、私は「もう子供のことを家で抱え込んであげようよ」って言っているの。彼女と彼女の夫なんて、底は見えてるわけですよ。悪い人たちじゃないんだけど、すごくバランスが悪い。子どもは、その彼女たちのことを「いい親だ」って思い込んでいる。教えてあげたいですよ。「あの親はひどい親だよ」って(笑)。「早く離れた方がいいよ」って(笑)。私は、私の友達もいい人だと思っているんですよ。でも、夫婦のバランスが悪かったり、めぐり合わせの中でいるんなことが起きざるを得ないわけですよ。それから、夫婦のこっちは側にはおじいちゃんとおばあちゃんがいるわけでしょう?家族関係の中で、とりたくない関係も取らざるを得ないということは、どうしても起きてくる。家族と言ったって、ひとつの核家族の周辺にはさらに沢山の家族関係があるわけだから、母親ひとりの力だけじゃどうにもならないことって、いっぱいあるんですね。だから彼女に「あなたの力だけで何かやろうと思ったら絶対に駄目だよ」と。「極力、外で付き合い合ってくれる人がいるんだしたら、ほかの家の父親に頼むのよ」とか言っていたけれどね。でも、色んなところに行くと「家族でどうにかしろ」「家族でどうにかしろ」って言われちゃう。でも、家族でなんか、どうにもできないよ。どうにか出来ない家族だから、現実の問題が起きてるわけでしょう?子どもはやっぱり「申し訳ない」と思って育っちゃっている。とても申し訳ないと思っているんですよ。

大体、薬物依存の子どもたちって、実はすごく申し訳ないと思ってるんですね。親に対して。小さい時から申し訳ないと思っていることが割と多いんですよ。「自分には何の力もな

かった」「親を守れなかった」とか、申し訳なさみたいなのを抱えている。引きこもりしたり、家庭内暴力する男の子たちは申し訳なさっていうのをものすごく持っている。ものすごく自己評価低くて、どういう風にコミュニケーションしていいのか、ぜんぜん解らなくなっちゃっている。そんな状況になっちゃっていることが多いのね。

そんな状況を、家族の力でどうやって変えられますか？家族だけでは、本当はどうにもならないわけですよ。そうすると、皆さんがここにいらしているみたいに、家族は家族で関係の持ち方を勉強して、変わっていくことが必要となってくるわけですよ。

その友達には結局、私の知っているカウンセリング機関を教えました。「あなたが幸せで落ち着いていることが、子どもが落ち着くための土台だからね」って。子どもに関しては、関わってくれる周りの人たち全部にお願いしなさいって。彼女とお父さんだけではなく、周りの大人たちもいるなかで、息子さんが動くのが一番いいだろうって思うんだけど。普通は、そんなに近所の人なんか関わってくれませんか。でも、たまたま家のそばに関わってくれる大人がいるそうなんです。みんなで卓球やったりとか、パソコンの勉強したりとか。パソコン教室の誕生会とかがあって、家族に関係なく誕生会やってくれたり、そういう場所があるんだって。「そっちにお願いしちゃった方がいいんじゃない？」っていうふうに言ったんだけど。

家族の中で抱えて何とかしようと思うと、どんどんどんどん引き込まれて行っちゃいますよね。私自身も息子とね、先生に何か言われるとね、いつも息子と二人だけの関係になっちゃうの。私が責任取らなきゃいけないような気がしちゃってね。夫もいるんだけど、夫は何も考えないから(笑)。夫に言うと彼はさ、「お前は後ろばかり歩くなよ」とか言うだけなの。「そんなこと、言ったってしょうがないじゃんよ」って。「本当の問題は、そんなことじゃない」って。うちの夫ってそういう人だからね。私は、息子にはなんか言いたくなってしまふ。うちの子どもの、それは個性だと思うんだけど、それをあんまりネガティブに考えると、前もって言いたくなるじゃないですか、色んなことを。「こういうことで失敗あっても、あれだよ」とかね。

母親との関係

私はそれを、母親にやられてたんですよ。「ハル工、世の中は怖いところだからね」って。「色んなことされても気にするんじゃないよ」って。「怖い」とばかり言われてたから私、すごく不安が強いんですよ。で、そうすると子どもに、言いたくなるんですよ。うちのお坊ちゃんもいよいよ中学ですからね。「中学行ったら、怖いお兄さんが恐喝するよ」とかって言いたいんですよ。「恐喝されたら逃げるんだよ」とかね(笑)。「その怖いお兄さんのところには寄るんじゃないよ」とかね。「お前、どうやって逃げるか勉強しとけ」とか言いたくなっちゃうんだよね。昨日、先生に「くれぐれも上岡さんそういうことは言わないで下さい」って言われて、「いや私もね、言わないように努力しますよ」って。

私、母親からされてたから、つい同じことをしそうになっちゃうんですよ。実は、私の母親も、不安な家で育った人なんです。うちの母親は、彼女の父親、つまり私のおじいちゃんが失意の人でね。終戦のドタバタした時期が引っ掛かってたから。一時期、母を育てている一番大変な時に、

アル中でギャンブル中毒になったんですよ。暴れ狂ってた。最後の方になったら、人格者になってしまったんですけど(笑)。母さんは本当に困ったみたい。始めのうちの、あのひどさを知ってるから。それで最後には人格者になっちゃったから、「なんか合わないわ」みたいなね。「最後に言いたいことがいっぱいあった」とか、母さん言っていましたけどね。

だから、母はいっぱい不安を持ってたもんだから、私たちに、私と弟に対して先回りしていっぱい言ってくれたんですよ。でもね、それはとって不安を呼んじゃうんですよ。自分で子どもを持つと言いたくなっちゃうんですよ。失敗するのが見えているとね。「そんなことしてると、こういうこと起きるよ」って。施設でも時々やっちゃうことがありますよね。「ほら言ったじゃん」とか言って。駄目なんですよ、それは。「ほら言ったじゃん」とか、「私、言ったはずだよ」って言うのね。関係が近ければ近いほど反発しちゃうから、飲み込まなきゃいけないのね。だけど、言いたくなっちゃう。「ほら、お母さんの言ったとおりでしょ」って。そうすると子どもは、絶対に言うこと聞かなくなっちゃうのね。同じことを繰り返したり。反発してしまったり。余計な手出しをせずに、自分が穏やかな気持ちでいるように、自分のすべきことをきちんと見て、していくということができるようになる。それは、すごく大変ですよ。

最初にハウスに相談に来られるお母さんたちは、「子どものクスリを何とかしてくれ」って思ってくるわけですよ。「子どものクスリを今すぐ止めてくれ」って思ってるわけですよ。「今日止めて！」って感じですよ。「今、止めて！」って。皆さんもそうでしょ？「今すぐ自分の子どものクスリを止めて」って思っているでしょ？(会場の多くがうなずく)でもね、やっぱり今すぐ止めることは難しいんだよ。さっきも言ったけれど、ダルクってところはクスリを止めるための施設であるけれども、クスリを止めるための動機付けをしていくところでもあるんですよ。そうすると、初めてお会いした時には、「まっ三年くらいの間に方向が見えるといいかなあ」くらいの感じなんです。私たちとしてはね。

ただね、その三年という期間が早まるとしたら、ご家族が足繁く通ってくれることですよ。こういう場所(家族会やナラノン)に家族が通って下さると、その子ども達は、「家族が変わった」って感じがするわけですよ。そこに(ハウスのメンバーの)お母さんがいますけど。お母さん、娘は言ってますよ。「お母さん、変わった」って。それはね、例えば言葉でこんなんよ、ああなんよって言うんじゃないかって、ふっとしたところで出てくるわけですよ。家族が変わったっていうところは。

私にもありましたね、そんな経験は。母と一緒に買い物に行ったとき、「ジーンズを買ってあげる」って母が言ったんですよ。私は「いい」って言ったんですよ。普通だったら「買ってあげるよ。いいから買ってあげる」「いいよ、いらないよ」っていう繰り返しがあって、いつも私は最後に買ってもらうんだけど。なおかつ、「こっちの方がい



カット：きどりえこ

い」とか言って。より高いものをね(笑)。でもある時ね、クスリを止めて一年半くらいした時だったかな。「買ってあげる」と言われて、私が「いいよ」と言ったら、「あ、そう」と言ったんですよ。それでね、「いやあ、参ったなあ」と思ったの(笑)。今までだったら、ここでごちゃごちゃして、お互いに巻き込み合って、より高いものを買ってもらえる方向にもって行けたのに「買ってあげる」「いい」で終わっちゃったから。ごちゃごちゃのしょうがなかったんだよね。「ああ、母親は変わったんだな」と思ったのがありましたよね。

それから、もっと母親が変わったと思ったときはね。うちって、アルコール依存の家系なんですよ。兄弟で一人、必ず出るんですよ。だから、私と弟だったら私。母の兄弟は母の弟がアルコール依存なんです。母の前の世代だと、母の叔父がアルコール依存なんですよ。母のところで、母親の兄弟五人に一人くらいでアルコール依存なんですよ。DNAがあるんですよ、うちは。母の家系って結構ひどいんですよ。アルコール依存で喘息で糖尿なんですよ(笑)。私、アルコール依存で喘息なの。母にね「母さんさ、アルコール依存で喘息で、糖尿まで出たらどうすんのよ。あんたの家系どうにかしてよ」と言ったんですよ。前の母だったら泣き崩れて、「どうせ全て母さんが悪いのよ」と言っていたわけですよ。絶対。でもね、あるとき母がこう言ったの。「ああ、大変ねえ。世の中にはこんなに不幸が集まっちゃう人もいるのね」と(笑)。そうしたら、前だったらそういう会話でね、母と子どものさ、「嫌なんだけどお馴染みの会話」とあるじゃないですか。ぜったい繰り返して、同じ不快な気持ちになって、必ず同じ喧嘩して嫌な結果になるっていう。母との間で私も同じパターンがあるんですよ。そうすると必ずね、そういうふうになると母がよよと泣き崩れて、「どうせ私の家が悪いのよ」とかって言うの。一晩くらい泣いて、それで「お前が悪い」とかって最後に言われるのね。前だったらよ、わざわざ電話してきてさ、「私も友達に言ったわよ、娘がこんなこと言うって。そうしたらね、本当に大変な娘さんねって、同情されたのよ」と。わざわざ電話してきてそんなこと言うわけですよ。前の母だったら。「なんだよ！そんなことわざわざ電話してきて言うか？」と思うんだけど。でも母はね、今はそういうふうになるようになったんですよ。「そんなに不幸も集まっちゃう人もいるのね」と。

要するに母も私に対して「ハルエを何とかしよう」とか、すごくあったんですよ。母は30の私が子どもを産むまで「ハルエは私が何とかしなきゃ」みたいな思い込みがすごかったんですよ。それが段々、母は母として生きていくようになっていくな。父と母の生活を大切に、生きていくっていう方向を母が徐々にとるようになった。私は病弱だったからね。絶えず母にしてみると「発作起こしてるんじゃないか」とか、色んなことが心配で仕方がなかった。アルコール依存にもなっちゃって大変だったからね。「また飲んでるんじゃないか」とか、色んな気持ちがあったんですよ。

でも、母が方向を変えて、違うことを父と始める。そうすると母から出てくる言葉が変わった。スタッフに言われたからとか、カウンセラーから言われたとかじゃなくて、小さなところでの母の変化っていうのがやっぱり、私との関係の変化になった。私は私で、自分を大切に、自分の家族を大切に生きていくっていうことが一番大切なんだって、母と私の間で境界線を作るっていうことをやり始めたわけですよ。

ここは薬物依存のお母さんたちの家族会だけど、私は摂食障害も持っているの、摂食障害のグループもやってるんで

すね。摂食障害のお母さんたちのグループもやっています。摂食障害のお母さんの話の中でも、やっぱりよくあるのが、お母さんが自分の母親の問題を引き受けていることが多いですよ。おばあちゃん。で、お母さんの問題を私たちが引き受ける。私は実は「母を支えている」と思っていたんですよ。母は、前のおばあちゃんを支えているつもりだった。境界線がないんですよ。母は私に対して、自分が母親を支えたように私に対して同じものを求めた。「言わなくても分かるでしょ？」っていう状態ですよ。母親と長女との関係ってそうなりがちなのよね。「言わなくても分かるでしょ？」「私があなたに何をしたいか、以心伝心でしょ？」って。母は、自分の母との関係。私は私の母との関係ですよ。

摂食障害もそうだけど、私が薬物を止めていくときってやっぱり、「私はどうしていききたいのか」ということを厳しく問われるわけですよ。「止めるのか、止めないのか」「止めるのか、止めないのか」ということをです。

それから毎日の中でね、自分が主体になっていくっていう過程でね、常にチョイスするわけです。「どっちを取ったら危くないのかな」ということをはじめの内は絶えず選択する。そのチョイスの一つに「やめている人の側にいる」というのがある。最初のうちは自分で決められないから。「使うか、使わないか」というんじゃないかって、「止めている人の側にいる」というチョイスをするわけです。クスリを前にすると使っちゃうから。クスリの前に行かないためには止めている人の側にいるという選択が一番、安全です。それをするのは私の母じゃなくて、私なわけですよ。

でも摂食障害とか、依存症者のお母さんの中には、自分のお母さんのことを背負っていたり、あるいは周りのご兄弟のことをずっとやってらっしゃる方とかね。自分の家族以外の問題をたくさん抱えていらっしゃる方が割と多い。だから力があるっていうのかな？力はあるんだけど。そういう方には反対に、境界線を作れない人が多い。境界線を乗り越えて、抱えるべきではない問題まで抱えてしまう。あるお母さんが言ってたんだけど、「自分では、おかしって気づかなかった」と言うわけ。おばあちゃんの家には10年間、掃除しに行っていたんだって。おばあちゃんの家には長男夫婦が住んでるんだって。おばあちゃん夫婦と長男夫婦が住んでいて、その長女がね、10年間、掃除しに行っていた。「どうやって掃除していたの？」って聞いたら、お嫁さんがいない間に掃除してね。お嫁さんにばれないようにおばあちゃんが掃除したことにして、掃除してたんだって。そうしたら、その家の娘さん二人、おかしくなっちゃったんだよね。何か、おかしかったんだと思うのね。そこのおばあちゃんも相当にコン



カット：きどりえこ

トロールする人だったんだと思う。二人が家に引きこもっちゃって、長男夫婦は外に出ちゃったんだって。それで残されたのが、年老いたおじいちゃんとおばあちゃんと、引きこもりの娘二人で「私は相変わらず掃除をしに行ってるんですけど、娘二人が摂食障害で引きこもってるんですよ」って。すごいでしょ？「お母さん、やめなよ、そっちのことじゃなくて自分のこと心配しなよ」って。だけど「おばあちゃんに人非人って言われちゃう」って言うわけですよ。「今まで何十年も掃除してきたのに。長男夫婦もいなくなって、引きこもりの娘が二人いるのに、掃除もお前がしに来なくなって、私たちはどうするんだ」って、そう言われることを気に病むの。

依存症の家族は知らない間に、周りとの関係で、当然と思ってる必要のないことを引き受けていたりすることがある。境界線がないこともある。そうすると、ご両親自身が家族っていうのを、どこらへんを境界線にするかっていうことを考えていく必要がある。皆さん良くわかりますよね。姑さんとの関係とか両家との関係とかありますよね。そういうのが、問題があったときに助け合うような関係であればいいんだけど、そうじゃなくてもっと複雑にからんでいたりするケースがある。それを、責任を取ってもらわなければならないと取ってもらわなければならないように変えていくっていうことも、大切な問題でもあるんです。

まず親から変わる

ご両親が話している話と、本人が話している話は、同じことなのに全然違う話をしている時がありますよね。お母さんは「うちは幸せな家だった」とか言うんだよね、時々ね。「お前がヤク中になったから家は不幸になった」とか言うんだけど、本人に言わせると「うちは暗い家で、お母さんは昔から鬱で、お父さんは酒飲んで暴れていて」とか。「自分はいつも心配してばかりいた」って言うような話があります。ときどき、本人の娘さんの話とお母さんの話が全然違うのに笑っちゃうんだよね。「ここまで違うか？」っていうくらい違うんですよ。例えばお母さんはね、「家の義理の父は人格者です」という話をするわけですよ。「うちは本当に幸福な家です」って。でもメンバーは「いや、おじいちゃんて愛人がいて、いつもおばあちゃんを蹴倒して愛人にお金持って行っていったんだよねえ」って言って。「おばあちゃんは玄関で泣いてたんだよ」とかって（笑）。「私はよくおばあちゃんを慰めていた」とかね。「えー、うそお！だってお母さん、幸せな家だって言ってたよ」って言うのと、「だって、いつも殴られるの見てたもん」みたいなね。そういう話もよくありますよね。子どもにとってそういうときって、たとえばそれが家族の歴史の中では一時期だとしても、すごく大きく写ったりとかするじゃないですか。大人にとっては解決されてることで、子どもにとっては解決されていないことだったりとかするんですよ。だから友達たちが離婚する時に、私は言うんです。子どもにはきちんと『お前たちのせいじゃないよ』って言うておかないとね」って。

ハワイに行ったときに私、喘息の発作を起こしたことがあるんですよ。ひどい発作だった。救急車が来て、アメリカ人の救急隊が取り囲んだのね、私を。そうしたらうちの息子が救急車を怖がるようになってしまった。小学校1年生のときに人面犬の怪談の話があってね、「人面犬を見たものは交通事故に遭う。救急車で運ばれて、その後その人の姿を見たものはいない」というテープを聞いたとたんにね、うちの子、

失神したんだって。先生から「今すぐ迎えに来てくれ」って電話がかかってきたのね。「怪談のテープを聞いていたら突然、失神しちゃったんですよ」って。怪談のテープって何ですかって言ったら、人面犬って言うんですよ。「意識失っちゃったんですよ」って。それでね、一年後ぐらいに「なんでもあの時はどうにもならなくなっちゃったの？」って言ったら「だって人面犬を見た後に救急車で運ばれたら二度と帰ってこないって。母さんがハワイで救急車で運ばれて、僕は二度と帰ってこないんじゃないかって思った」って言うわけ。「ハワイに来たのがいけなかったんだ」って思ったんだって。「旅行なんかしなければ母さんが救急車に乗ってどこかにいくなるとはなかったから、ハワイになんかこなければよかった」ってすごく思ったっていうのね。人面犬の話の時には、ハワイから半年くらいしか経ってなくて生々しかったから、救急車で聞いただけで気を失ったらしいのね。そんなに心に残ってるのかって、びっくりした。「私は喘息だけど、喘息は死ぬ病気じゃないよ」って説明したのね。救急隊員四人、こんな大きい人にパーって連れて行かれちゃった訳だから。それで二度と救急車は嫌になっちゃったみたいなんだけど、何が起きているのか私には解らないから。それが分かるまでに一年くらい掛かった。一生懸命命を懸けてきているんだけど、考えの違いがあつたり、勘違いがあつたり、ずれがあつたりってところが親子であればあるほど起きますよね。

さっきも言ったけれど、「必ずこういうパターンをたどる」と言う風に、似たようなコミュニケーションのスタイルを親子の中で作っちゃうことがあるじゃないですか。子どもはそこでたいていは親を怒らせる。そうするとお金が出ると思っただけでね。喧嘩して、子どもが親を怒らせて、ごたごたするとお金が出てきませんか？みんな、そうじゃありません？ごたごた、ごたごたして最後に「金くれ」って。「うるさい、金くれ」とか言って。大体、パターンは同じ方向性なんだよね。子どもはまたよく親を見ているから、どこが弱みかって、分かっているじゃないですか。

近藤もね、お母さんとお父さんが大変だった時があるみたい。一回、お母さんに殺されかけた時があるのね、小さい時に。近藤よく言ったもん。「くそばばあ、俺を殺そうとしたことあるだろう」って言って、金を取っていたって。弱みよね（笑）。そうすると、「私があれをやったからかしら？」とかね。つけこまれるじゃないですか。「ごめんね」とか何とか言っちゃったりして。駄目なんですよ。その、同じ手に乗ってはいけな。だけどそういう弱みっていうのはどんな親でも持っているでしょ？あれかもしれない、これもかもしれない（笑）。でも、それってやむをえなかったことでしょうか？誰だって好きでやってるわけじゃない。でもそこらへんのところは、ミーティングに出て、親御さんにも整理をしておいで欲しいんですよ。親御さんの方がまず整理を始めると、実は子どもにも整理が出来るようになってくるんですよ。

親御さんがミーティングに出て変わり始めると、メンバーの話の中に見える親子の関係が変わるから、「変わったな」って思うんですよ。すぐに分かりますね。そうすると、親が行っている機関に「行ってみようかな？」って思うようになったりね。

私が親御さんと会うときは「先にあなたが一年間、ミーティングに通ってください」って頼むことが多いんです。一年間、子どもを関係なく、家族がせつせと先に通ってくれたら、子どもは出てきますよ。だって自分のために行っているんだもん。分かっているわけですよ、言わなかった。

「わざとらしい、本当に親はわざとらしいよ、俺のために通いやがって。通ってるうちはクスリ止めないぞ」って、はじめは言うでしょうね。でも、一年間親に通われるとね、もう真綿で首を絞め続けですからね。落ちますよ。とりあえず登場せざるをえないような状況になるわけですよ。親にこの場（家族会）に一年間、通われて見なさいよ。いやあなかんじだから。それも、親に変化されたりするともっと嫌ですよ。ポロポロだったはずの親が、なんかきれいになってね。電話で話してるのを聞いていると、自分の息子のことは放って置いて人の息子を「大丈夫よ」なんて言っているのを聞くとさ、子どもはむかむかしてね、「俺のことをかまえよ！」って感じですよ。それなのに何も言わずにちゃっちゃとミーティングに行かれたりとかすると、「何か自分もやらないとまずいよな...」ってね（笑）。そんな気がね、してくるんですよ。大体、依存症者って単純なやつが多いし、寂しがり屋だから。結局は出てくるんですよ。だから、ご両親がこういう家族会に出てきているお子さんは、治療につながる人が多いですよ。

依存症だけじゃなくて精神疾患を持っている方もいるからね。私も持っているんだけど。私は秋に鬱になりやすいんです。鬱を持っている方とか、統合失調症を持っている方もいるから。依存症以外の病気を持っていると、もうちょっと時間がかかるからね。その時はもっとミーティングに出て、医療の人とも相談しながら付き合っていくって言うことをしないと難しいですよ。ダルクにつながったからすぐにクスリ止める、すぐに回復するわけでもないんですよ。私なんか、うちの子が状態悪くなったら絶対ダルクに預けちゃって、一箇所三ヶ月で三十箇所だから、さざんが九十ヶ月くらいは稼げるかなあとか思ってるんですけども（笑）。そのうちに大人になるかなって。そういうこともまた大切なですよ。いきなり何もかもできるわけじゃないです。ダルクに行くと、東京ダルクに行くと、日本ダルクに来て、また別のダルクに行くと、いろんなところに仲間を作って、成功や失敗を繰り返して。徐々に徐々に社会性が出てきて、スリッパはするかもしれないけれど、その中で経験が広がっていくってこともあるんですよ。親としては、すぐにクスリ止めさせたいと思いますよね。親だって、うちに来るメンバーと初めて会ったときに何度、無理やりでも止めさせたいって思ったか。止めさせたいですよ。危険なこと分かっているから。でもね、こっちが今すぐ止めさせたいって思って付き合うと、向こうは全然心を開かない。かえって絶対違う方向に行くってというのは自分の経験で解っている。そうすると、困った時にいかにコミュニケーションを取れるような関係作りをして行けるかって考えながらやるんだけど、きっかけがいつかっていうのはなかなか分かりづらい。

私に分かっていることは、ご両親がグループに通っているうちは良くなるんです。これだけは間違いない。家族だけで抱え込まないってことは一番大切なことですよ。それから、ヤク中の子もなんて恥ずかしいと思うかもしれないけれど、恥ずかしいと思わない。できれば親戚にも、事情を話せる人には話をするってということも、やってみると少し心も楽になるかもしれないしね。親戚の人たちにも「お前の育て方がいけなかったんだ」なんて責める人たちがいるかもしれない。反対に分かってくれる人もいるかもしれない。

私のうちは何て言ったって、すごいDNAなんですよ（笑）。私が一番若くして発症したから、その頃には誰もいなかったんだけど、その後はうちはすごいもんね。もう、いっぱいいますから。摂食障害だし、カード破産だし。

でも、合言葉は「ハル工が良くなった」っていう合言葉がありましてね（笑）。近藤もいるから、「とりあえず、ハル工と近藤に相談しよう」っていう感じになっている。私がヤク中で、夫がヤク中で、ときどきテレビに出てくるって知っていたら「なんか、どっかおかしいんだけど、どうすればいいんだろう」っていうのは言いやすいでしょうね。みなでどうするかって話し合いをするのは、やりやすい方がいいですよ。何か問題が起きたときにね、その子だけが問題ってわけじゃないんですよ。その子一人の問題では絶対に、ないんですよ。そうすると、まず、ご両親が変わる。ご両親の関係が変わると、本人も変わらざるをえないという感じになってくる。



カット：きどりえこ

絡んだひもをほぐす作業

私と私の母親の関係っていうのはすごく密着する関係なんです。うちの弟夫婦は、母と一緒に住んでいるんですね。私と母は密着しているから、お嫁さん（義理の妹）の悪口を私に言っていたわけですよ。私も聞いていると、ちょっとむっとするじゃないですか。でもね、私と母が大喧嘩したんですよ。大喧嘩して、私はもう電話線を抜いちゃってね。「誰が二度と電話なんかするか！」って怒っていたんですよ。あんまり母に対して本気で怒ったことなかったから、初めて全身全霊で怒ったんです。そうしたら、弟から電話がかかってきて「お姉ちゃん、年寄りいじめちゃ駄目だよ」とか言う。電話かけてきて「母さんが『姉さんとはもう絶交した』って言って来たよ」って言うんですよ。

うちの母はコントローラーだからね。弟にさりげなく話すと、弟は当然、電話してくるじゃないですか。それで揺さぶろうとしているわけですね。私は、折れなかったのね。そうしたら母はさ、こんど、お嫁さんと話をするの。「ハル工、こんなひどいこというんだよ」って。そうしたら、お嫁さんが慰めるわけですよ。「お母さん、炊き込みご飯作ったんだけど、食べる？」なんて言ったらいい。二人は話をするようになるんですね。「本当に、あなたのほうがどのくらいやさしいか」なんてね。私は「いいよ、そうやって仲良くしてくれ」って。がんばったのね。一方でね、私はその弟のお嫁さんに、「あの人が何であんなにコントロールするのかな？」っていう話をしたの。いまだに私は母にしょっちゅうコントロールされちゃうんです。お嫁さんに母の悪口を言ってたんですよ。すると、お嫁さんが言うにはね、「お姉さんの家族って、ものすごく密接で仲がいい」って。私と母と弟と父が。初めてお嫁に来た時には、なんて仲のいい家族かって驚いたって。なんていい家族だろうって思ったって。ところがお嫁さんはアル中です。アル中でヤク中なのね。それでね、お嫁さんは「お姉さん、長く暮らしてみたら分かり

ました」って。「仲が良すぎるのも胸苦しいものですね」って。うちの母の愛情の深さにね、さすがにお嫁さんも胸苦しくなっちゃった。お嫁さんはね、自分の母親と自分の関係がさっぱりしてらんで、自分の母親が冷たい人だと思ってたんだって。そうしたらね、「私の母親の良さも分かりました。さらっとしてるのも良いものです」だって。

私と彼女が仲良くなって、そうしたら今度は、弟が母と喧嘩したんですよ。私が大喧嘩した三ヶ月後ぐらいに。そうしたら弟から電話が掛かってきてね、家を出るとか言うんですよ。この間、私に老人いじめたって言ったのは誰だと思ってたんだけど(笑)。「お姉ちゃん、あの人は本当にひどい人だ」って。うちの母ね、コントローラーだからね。策士ですからね、ひどいんですよ、ときどき。弟はそういうふうになって大喧嘩したんです。私と弟は結局、40越えて初めて母と大喧嘩したのね。母はとても悲しい人だったから、私も弟も、母を支えなきゃいけないと思って育ってきたんですよ。それで密接で仲の良い家族だったんだけど、お嫁さんに言わせると、真綿で首を絞められるような苦しい関係に見えることもあったわけです。そこで喧嘩をしたので、私と母は、密着した話をあまりしなくなりました。母は、お嫁さんと話をするようになった。そうしたら、家族の中の関係がとても良くなりましたよ。

私も、あんまり聞いちゃうと駄目なんですよ。入ってそういうところありますよね。誰かと誰かが仲がいいと、入っていけないという形になったりするじゃないですか。だから、これで私と弟と母がまた妙に仲が良かったら、お嫁さんはすごく孤独な感じになると思うんですよ。私が母親と密接な関係を止めた。そうすると、他の人との関係が開けてくる。人との関係って、そういうものかなと思う。私との大喧嘩をしたので、母親とお嫁さんが仲良くなったんですよ。それまでは、いまひとつ溝があったんですよ、うちの家族の中には。安心して喧嘩ができるようになったら、やっぱり良くなりましたよ。でも相手のことを思うと引いてしまったり、やっぱりやらなきゃいけないんじゃないかって思ったり、そういうのは相変わらずなんですけど。

周りから見るとすごく変な関係なんだけど、長い間やっているのが当然って思ってしまう。そんな関係ってありますよね。うちのメンバーでやっぱり、こんなケースがあった。問題のあるおばあちゃんがあまりトラブルを起こさないようにって、母親が抱えてたんですよ。娘さんが調子悪くなって、そのうちの一人がうちにいるんだけど、やっぱり薬物依存です。もう一人の方は摂食障害になっちゃった。お母さんは分からないわけですよ。長い間、病気のおばあちゃんを抱えて、そのおばあちゃんがトラブルを起こさないようにって一生懸命、抱えてきたわけだから。そこにたまたま、老人介護の訪問看護が入って、その訪問看護師がこの家のおかしさに気づいたの。訪問看護師の方から保健所に相談して、保健所の方で、このおばあちゃんはボケじゃなくて精神疾患だということになった。そしてその家族のふたを開けたら、娘は薬物依存と摂食障害だった。信じられないでしょ？訪問看護師が偶然におばあちゃんの病気を見つけたら、子どもたちまで病気だったんだよね。保健所に介入してくれた精神科の先生がすごくいい先生で、その娘も含めて面倒を見てくれたんです。いろんなことがあったんだけど、今はおばあちゃんは病院に入って、お母さんと娘さん二人も治療を受けています。家の中が閉鎖されると、家族って密室のすごく息苦しい関係になっちゃいますよね。そこで行われていることは外側から見えないし、いつもそういうふうにして

いると分からなくなりますよね。家族会に来て話を聞くと、段々段々、分かってくる。どこがおかしいのか。これは、誰かが悪いわけじゃないんですよ。薬物依存の本人が悪いわけでもなくて、ご両親が悪いわけでもなくて、兄弟が悪いわけでもなくて、バランスがすごく悪くて掛け違いが多くて、勘違いが多くてっていうような感じ。そのバランスの悪さや、掛け違いを少しずつ戻していく、それが大切なんですよ。本人に、どうやってクスリを止めさせるかっていうことを話をする時に、いつも家族の話になっちゃうんですよ。どうしても。家族がどう変わるべきか。そこが変われると本人は早く良くなれるんですよ。それは確実なことなんです。それだけは良く分かっています、やっぱり。

まあ、だからね、お母さんもこういうところに来ていると、自分自身の親との関係について話したりするようになるでしょう？それから、さらに子どもの話をしたり。そうすると、誤解していたことが実はそうじゃなかったのって思ったりとか、混乱していた問題が少しずつ解決していくような、そんな話ができるようになるんですね。本人が、親に依存しようと思って話し始めると、お母さんが自分の親の話とかするとね、案外いいんですよ。本人は「自分のことは自分でやらなきゃいけないんだな」って思うんですよ。お互いがお互いの話をよく聞かって言うことも大切ですよ。家族のことを話して、言葉にしていくということは、絡み付いちちゃったひもをほぐしていく作業でもあるんです。

家族の中だけで抱えると家族は何もできない。それは当然のことです。私は、私の家族のこと、なんにもできませんよね、やっぱり。やっぱり家族でこんがらがっちゃった時には必ず、外側の助けっていうのが必要なんです。それは当然のことだと思っていますね。

ちょうど、そろそろ時間かな。また家族の話になっちゃった。私の話は偏りが多いから、皆さんからちょっと、わかんなかったこととか、聞きたいことを頂けたらなあと思います。話してないこといっぱいあるもんね。どうぞ。

(この稿は、2003年12月にアバリ家族教室で行われた講演を再構成したものです。この後、出席して下さった30名近いお母様たちからたくさんのご質問が寄せられました。紙数の都合上、掲載できず申し訳ありません。ハルエさんのフリートークは近いうちにまたアバリで企画しますので、皆様、ぜひふるってご参加ください 編集部)



カット：きどりえこ

サルでもわかる

アクション講座

= 施設編 =

第1回 「ここはどこ？」



ある晴れた夏の朝。施設の庭で一人の男が、大声で怒鳴っている。隣に立っているもう一人の男が、怒鳴る男を必死に説得している。

入寮者A:「なにがミーティングだよ！ ふざけんじゃねえぞ！ 朝っぱらからそんな、座らされてなにかくっちゃべれって言われたって、しゃべることなんか何もねえよ！」

職員:「遊びに来ているわけじゃないだろう。ここで生活する上では、これがプログラムなんだ。何しに来たんだ？ クスリを止めるために、プログラムを受けに来たんだらう？」

二人の横には丸いテーブルがある。そこには10人前後の男たちが腰掛けている。

入寮者B:「おい、いい加減にしろよ。ミーティングはもう始まっているんだ。おい司会、はやく進めろよ！」

入寮者C:「はい。...それではミーティングを始めます。ダルクとは、毎日グループセラピーを行っている、アクションから回復したいという仲間の集まる場である...」

仲間たちがミーティングを始めてしまったので、入寮者はしぶしぶ椅子に座った。職員はその隣の椅子に腰掛けたまま、腕を組み、目を閉じている。苦渋の表情だ。すっごく具合が悪そうだ。

なんだかきな臭い施設の風景である...

そして！ なんと！
サルは、ここにいた！

サル:「(入寮者たちと一緒に円卓の周りの椅子のひとつに腰掛け、やたらと周囲に愛想を振り撒いている。そのサルの心の声)ウキキー！...な、なんだよ、ここは... 感じの悪いやつらだな...おっかないな、みんな何だか怒っているよ...ああ、やっぱり施設なんかに来るんじゃなかった。『クスリを楽に止めるなら仲間が必要だよ！ 仲間作りには施設が一番だよ！』なんて、自助グループの先行く仲間に勧められたもんだから、思い切って、群馬県の山の中のこんな施設に飛び込んでみたのに...山の中なら、サルには居心地がいいかもしれないと思ったのに...失敗した、ウキー！ ややややっぱりボク、だだだだだまされたんだ！ ああああいつは、ぼぼぼボクのこと嫌いだったに違いない！...グループからボクを追い払うためにあんな嘘をついたんだ...ウキー！ どうしよう、昨日来たばかりだけど、『やっぱり退寮します』とか言ったら出してもらえるのかな...困ったなあ、昨日、入寮契約書にはサインしちゃったしなあ...」

入寮者C:「はい、それではその隣の仲間、お願いします」

サル:「(心の声つづく)東京の自助グループにつな





がって半年間、クスリは止まらなかった...グループの仲間に教えてもらった病院で、サルだからお金がありませんと言ったら生活保護にはしてもらえなければ...この施設の入寮費は、生活保護費を全額納入すれば、その中から一日1000円のお小遣いをもらえるらしい...サルのボクにはお金の管理なんてできないから、すごく助かりはするんだけど...でででも、こここここんなおっかない人たちと一緒に生活するなんて、いいいい嫌だ、ででできないよウキキー！」

入寮者C:「その仲間、どうぞ。今朝のミーティングのテーマは『一人ではできないこと』です。テーマに沿わなくても結構です」

サル:「...えっ？ウキキー！...ぼ、ぼ、ボクですか？」

入寮者C:「そうです。お願いします」

サル:「ああああはいはい、ぼぼぼボクはあの、あ、あ、そうだ、アディクトのサルです」

全員:「(ぶっきらぼうに)サル！」

サル:「(びくっとして)えええーと、ははは初めまして！ぼぼボクは昨日、この施設に入寮させて頂きました。まままだ来たばかりで、何も分かりません。こ、こ、ここにくる前は、社会で一生懸命に働きながら(ウソ)、自助グループに通う生活をしていたのですが、仕事が大変で、ときどきクスリを使っちゃう生活がやめられませんでした。仲間に相談したら、『施設には楽しい仲間がいっぱいて、クスリをやめる手助けをしてくれるよ』と教えてくれたので、頑張りすぎもよくないかな...なんて思って、思い切って会社を休んで入寮してみました。エへ、エへ、エへ...えええーと、テーマは『一人ではできないこと』ですね？そうですね、ボクも、やはり人間が生きていく上では、ああいやその、ボクは見ての通りサルですけども、サルもそうなんです、ハハ...一匹では何もできませんね。やは

り素敵な仲間の皆様があつての自分だと思うわけです。すばらしい仲間の皆様と出会えて、本当にボクは幸せですね。やさしそうで、頼もしそうな人ばかりで、本当に...ハハ、ハハ、どうぞよろしくお願ひしますね、ウキキー！！」

入寮者C:「...ありがとうございました。(なにやら意味ありげな薄ら笑いを浮かべている)」

サルが周囲を見渡すと、仲間たちはみな、似たような不敵な薄ら笑いを浮かべている。そっぽを向いたまま、ぜんぜん話を聞いていない仲間もいる。

サル:「(またまた心の声)...な、な、なんなんだっ、このミーティングは！ととと東京の自助グループではみんな、あんなに暖かく迎えてくれたのに！ぼぼボクは、みみみみんなに嫌われちゃっている！！どどどどうしよう！！いったいこの先ボク、どうなっちゃうんだろう、ウキキー！！」

覚せい剤が止まらず、とうとう施設に入寮することになったサル！たどりついた群馬の施設は、こわもての、見るからにとっつきにくそうな入寮者がいっぱい！スタッフも、なんだかたよりにならなさそう！さて、この先のサルの運命や、いかに！？

次号につづく



この物語はフィクションです。写真と本文はあんまり関係ありません。
構成: シゲヤ・ブーさん

神無月才生の好評連載

ラブ&マーシー

ビーチボーイズ：
ブライアン・ウィルソンの光と影

第10回 「影」

両雄の対面

暗く冷たい底なし沼に、最初の一步を入れ、ズブズブとはまっていく。落ちていくのが分かっているのに、戻れない。ビーチ・ボーイズのリーダー、ブライアン・ウィルソンにとってはそんな時期だったのだろう。1968年暮れ、彼は26歳にして最初の自殺未遂騒動を起こしている。

場所はロサンゼルスナイトクラブ「ウイスキー・ア・ゴー・ゴー」。その夜、スリー・ドッグ・ナイトが出演していた。ブライアンが見出し、徐々に人気が上がってきたボーカルグループだ。

メンバーのダニー・ハットンと友人だったブライアンは演奏後の楽屋のパーティーに参加した。興奮して会場を去らないファンたちの歓声が外から響く。大声を上げて群がる美女、陽気ではつらつとしたメンバーの男たち。それらは、ちょっと前にビーチ・ボーイズが失ってしまったものだった。

ビルの窓を開けて、ブライアンが前かがみになる。

「何をしてるんだ？」とダニーが尋ねると「飛び降りるぞ」。ダニーが「つまらんこと言うなよ、ブライアン」と制止して窓を閉め、事なきを得た。

このときの心境をブライアンは後にこう語っている。

「自殺という認識はなかったし、生に終止符を打つという意識もなかった。ただ、余計なものを放棄すること、悪霊を沈黙させること、プレッシャーから解放されること、心の混乱を解決することしか考えていなかった」(「ブライアン・ウィルソン自叙伝」(中山啓子訳、径書房)より)

大物アーティストの威容と小さくなった自分。比較することで自尊心は傷つく。

ある日、エルヴィス・プレスリーがブライアンのスタジオに立ち寄った。ロックの創世主と国民的バンドのリーダー。米国音楽の50、60年代の顔が夢の対面を果たしたわけだが、それは「すれ違い」に終わり、気まずさだけを残した。

極度の緊張に達したブライアンは、エルヴィスがたしなむという空手のポーズをとって、彼にチョップする真似をした。すでにブライアンの衰退を聞いていたエルヴィスは「デューク、

君のことをちょっと気にしてるんだぜ」と声をかけたが、ブライアンの悪ふざけは止まらず、エルヴィスは早々に立ち去った。

空手のポーズを取り続ける「過去の男」だけが一人空しく残った。

鬼才

別の日にはダニーの紹介で、眼鏡姿の小柄な男がブライアンの前に現れた。「すごいピアニストであり、シンガーだぜ」とダニーは話す。「名前は？」とブライアン。「エルトン・ジョンだ」。

ブライアンは大音量でご自慢の「グッド・ヴァイブレーション」をかけた。圧倒されたように、身を固めてエルトンが聞く。ビーチ・ボーイズが66年秋に放った、最大のヒット曲「グッド・ヴァイブレーション」から2年余。明るいニュースはなかったが、暗い話題はいくらでもあった。ブライアンはLP「スマイル」に着手して挫折。音楽シーンでの影響力もなくなり、思いつきで健康食品店の経営を始めて、バスローブ姿のままレジをたたく隠遁生活に浸っていた。

萎縮した様子エルトンを見て、ブライアンは気を大きくしたのか「君もちょっと聞かせてくれないか」と言う。エルトンは「『グッド・ヴァイブレーション』の後ではちょっと...」と言いながらピアノに向かった。弾き語ったのは「ボーダー・ソング」「レディ・サマンサ」そして名曲「君の歌は僕の歌」。流れる魔法のメロディー、輝き出した宝石の原石。まだ有名ではないが、ブライアンはエルトンの才能をすぐに見抜いた。そして思いがけず、打ちのめされた。

「自分がエルトンにどれだけ嫉妬を感じているかと思うと耐えられなかった。彼の曲を聞きながら、彼が意欲に燃え、すごいインスピレーションを持っていることが分かった。かつての僕がそうだったように...」

この当時、ブライアンが溺れていたのはコカインだ。

自殺未遂を止めたダニーは、ブライアンを落ち着けるためにコカインの売人を紹介した。スプーンですくい上げて、鼻の穴から一気に吸う。これまで体験したLSDや覚醒剤のような、後味の悪さもなく、コカインはブライアンに「傑作を書き上げたような高揚感」を約束したという。ブライアンが毎日3、400ドルをコカインに使うようになると、弟のデニスがそれを目当てにたむろするようになった。薬が結びつけた兄弟の絆。

デニスは興奮しながらブライアンに話す。「すごい鬼才がいるんだ」

彼の新しい友人で、長髪のミュージシャン。ギターを弾くだけでなく、作曲もこなす。「何がそんなにすごいんだ?」「パワーだ。すごい説得力とパワーがあるんだ。それに女の子たちを思い通りに操るんだ」

チャールズ・マンソンという名のその男は、それから程なくデニスの家に移り住んだ。ブライアンから入手した薬物をマ



1970年ごろのブライアン・ウィルソン

ンソンに与え、その代償としてデニスには Manson が主催する乱交パーティーの参加権を得た。

ブライアンは「悪いヴァイブレーションを感じる」として Manson を寄せ付けなかったが、Manson 一派は遠慮せずにブライアンの家にもなだれ込み、台所を荒らし、車を乗り回した。

逆上

やがて Manson は自分をメジャーデビューさせるようにレコード会社に取り計らうように迫ってきた。デニスは困惑しながらも「指令」に従ったが、レコード会社からは相手にされず、妥協案として Manson の曲をビーチ・ボーイズが録音するという策を取った。

しかし、それが逆に Manson の怒りを買うことになる。Manson の曲「シーズ・トゥ・イグジスト」の歌詞を了解なしに変えて、Manson のクレジットを乗せず、デニス作の「ネバー・ラヴ・ノット・トゥ・ラブ」という曲として発表したからだ。ブライアンは「邪気がある」としてその曲の発表を見送るよう主張したが、デニスに聞き入れられず、新作アルバム「20/20」の中に収められた。

Manson はデニスの家から姿を消した。そして、デニスは「報復の予告」をしばしば Manson 一派の者から受けるようになる。

数カ月後、69年夏、事件が起きた。

人気女優のシャロン・テート(夫は「戦場のピアニスト」が記憶に新しい、映画監督ロマン・ポランスキー)、スーパーマーケットチェーンのオーナーで有名な富豪ラビアンカ夫妻が相次いで刃物で滅多切りにされて、遺体で発見された。

数日後、デニスの家に久しぶりに Manson が現れた。「どこに行っていたのか」と尋ねると、「鬼お」は「月に行っていた」と答えた。

11月、Manson とその一派はテートとラビアンカ夫婦殺人容疑で逮捕された。

取調べで、一派の全容が明らかになった。それは無知な若者を薬物と音楽で引き付け、組織するカルト教団で、信者の多くは中産階級出の女性だった。

実行犯の供述から、2件の殺人は教祖の音楽が認められなかった腹いせであることが判明。逆上の矛先がデニスとビーチ・ボーイズに向けられていた可能性も十分あったのだ。テート事件では「赤ちゃんがほしいの、お願いだから殺さないで」と懇願した妊娠9カ月のテートを女性信者が「お前に慈悲などない」と言い放ち、ナイフを振り下ろした。ラビアンカの妻は41回も刺されており、腹に「WAR」と刻まれていた。

刑務所の精神分析医は Manson を妄想型精神分裂病と診断している。なお、Manson は死刑判決を受けたが、判決直後にカリフォルニア州で死刑が廃止されたため、現在も収監中。「白人と黒人の世界最終戦争が起こり、その後 Manson ファミリーが世界を征服する」と主張し続け、今も多くの支持者が残るといふ。

Manson 一派の事件とその醜聞に名前が出たことで、ただださ「時代遅れ」の象徴とされていたビーチ・ボーイズが「忌むべきもの」へと、さらに転落していく。この時期に出たアルバム「サンフラワー」(70年8月発表)の全米チャート最高151位という数字が、すべてを物語っている。

しかしながら、「サンフラワー」は内容的には充実していて聞きどころが多く、イギリスでは「ビーチ・ボーイズの『サージェント・ペパーズ』」と評されるほどだ。ただし、ブライアンの独裁が崩れた状態で作られているので、それぞれのメンバーが死力を尽くして練り上げた名盤の印象が強い。

戦場の凱歌を思わせる雄大なデニスの曲想に引っ張られ、カール・ウィルソンのソウルフルな声が熱気を運ぶ。ブルース・ジョンソンがつむぐドリーミーな音像、マイク・ラヴとアル・ジャーディンの鮮やかなボーカルが描くカリフォルニアのさわやかな風。

コカイン禍のブライアンが提供したオリジナルは1曲のみ。「デイス・ホール・ワールド」。これが、どこが世捨て人の作った曲なのだろうと思わせる、驚きの出来。冒頭の出だしからコーラスがパァッと広がり、音の空間を埋めていく展開は圧巻だ。

1曲ならばまだ名作は作れる。その底力は、自殺願望の果てにつかんだ名作で、次回に紹介する「ティル・アイ・ダイ」で結実する。

神無月才生(かんなづき・さいせい)

音楽・映画評論家。1969年生まれ。英米のロック・ミュージックや香港映画シーンの切り口鋭い批評で知られる。コアな映画ファンの間では彼のホームページが大人気を博している。

神無月才生のホームページ <http://plaza.harmonix.ne.jp/~skz/>

APARI藤岡 アウェイクニングハウス



アウェイクニング・ハウスは、アジア太平洋地域アディクション研究所(APARI)が運営している薬物依存症からの回復のためのリハビリ施設です。

回復のためのプログラムは、自助グループ(NA=ナルコティクス・アノニマス)の手法を取り入れたグループ・セラピーが中心です。入寮者が全員参加するミーティングを毎日行っているほか、夜には地元で行っている地域のNAミーティングに参加しています。

このほか、入寮者が自主参加するかたちで、スポーツ・プログラムや農作業、陶芸、ボランティア活動など、さまざまなプログラムを行っています。

薬物依存症になる人のほとんどが、対人関係が苦手で自分だけの世界に引きこもったり、なにかに依存することで心の葛藤を解決しようとする傾向を持っています。施設では、同じ苦しみと闘う仲間をつくることで孤独感を解消しながら、ミーティングで正直に自分の話をする事で薬物依存に陥った自分自身の心の問題を内省してもらっています。

東京からJRと車で2時間半。群馬県藤岡市の自然の山々に囲まれた施設で、薬物乱用で荒廃した精神状態を安定させ、病的依存から回復・自立できるような環境と援助を提供しています。

アウェイクニングハウスの各プログラム



スポーツプログラム



ミーティング風景



農作業プログラム



陶芸プログラム



【入寮条件】

- 1、薬物依存から回復・自立をしようとしている本人
- 2、男性(年齢制限はありません)

【入寮期間】

3ヶ月、6ヶ月、12ヶ月の目安はありますが回復の度合いは個人差があるため特に定めません。

【入寮費】

月額16万円(生活保護受給者は応相談)

内訳	施設使用料(共益費含む)	¥60,000
	食費	¥30,000
	生活費	¥35,000
	プログラム・カウンセリング	¥35,000

フェロシップ・ニュース(第十号)

2004年8月1日発行

定価 500円 (年間購読料 5000円)

発行 APARI藤岡研究センター

〒375-0047

群馬県藤岡市上日野2594番地

電話 0274-28-0311 FAX 0274-28-0313

Email apari@mr.biglobe.ne.jp

http://www.ne.jp/asahi/np/apari/